

## 協会創立100周年記念式典

## U-35委員会企画パネルディスカッション

Architecture & Society  
/Architect in Society

日時：2017年3月30日（木）

18：00開場 18：30開演

会場：大阪市中央公会堂 大集会室

## 2016年度 U-35委員会メンバー

伊藤 昭裕（佐藤総合計画）

榎 恭志郎（大建設）

興津 俊宏（竹中工務店）

鬼頭 朋宏（大成建設）

小原 信哉（山下設計）

駒井 陽次（Style Agency/PARK Lab.）

下田 康晴（東畑建築事務所）

高畑貴良志（日建設計）

出来 佑也（昭和設計）

長島 薫（東畑建築事務所）

中村 祐記（大林組）

西森 史裕（大林組）

廣富 純（佐藤総合計画）

松島 将太（大建設）

三谷 帯介（鹿島建設）

宮武 慎一（安井建築設計事務所）

森下 大右（昭和設計）

若江 直生（日建設計）

## ●企画趣旨

今回U-35委員会が企画したパネルディスカッションは、我々U-35世代の建築における視野と領域の拡大を目的に、日本に留まらず海外にも目を向け、建築と社会のより良い関係性について探ろうという試みだ。海外でご活躍中の4名のゲストを招き、これからの日本の建築や社会を豊かにする新たな視点・ヒントを模索したいと考えた。

様々な地域や国、社会の中で生まれている新たな価値観に対して建築がどう応えていくのか。また、新たな価値そのものを生み出すために建築が出来ることは何か。「建築と社会」の幸せな未来についてのディスカッションを繰り広げた。

## ●これまでのU-35委員会

U-35委員会は、日本建築協会における「若手設計者を中心とした協会活性化のための活動プログラム」として、35歳以下の若手の設計者が集い、2013年4月に組織された。委員会の主な目的は、下記の3つである。

## ①業種・組織を超えた同世代をつなげる

プラットフォームの創出

## ②U-35世代の多角的な視野の獲得

## ③建築における多様な価値の社会への発信

これらを実現するため、2つの主な活動を続けてきた。1つは、建築以外のさまざまな分野のゲストを訪ねて座談会やワークショップを行う、建築の外から建築を考えるinputの場である「talk baton」。もう1つは委員会のメンバー間で共有している「建築と社会」にまつわる問題意識やtalk batonなどでの活動を通じた気付きなどに基づいて、皆で設定したテーマについて深く掘り下げ、多くの方々と共有し、その価値を広く発信するために開催している公開イベント企画「action」だ。

これら2つの活動の共通の手法は、「建築と社会」の関わりについて、みんなで分かりやすく問題を共有していけるよう、「社会」というものを身近なレベルにスケールダウンし、「建築と〇〇」というテーマを企画ごとに設定している。これまで「建築と木材」「建築と共有」など3回の「action」と「建築と農業」「建築と不動産」など10回の「talk baton」を開催し、さまざまな知見を獲得してきた。



1st action 「建築と木材」



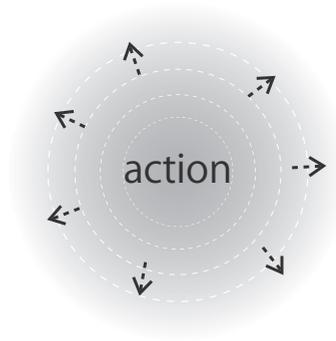
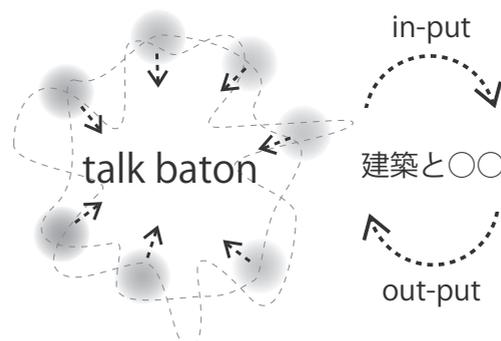
2nd action 「建築と拡張」



3rd action 「建築と共有」



talk baton4 「建築と地元」



U-35委員会の活動イメージ

### ●100周年企画 海外フィールドワーク

これまでの活動における「建築と社会」のより良い関係を探る企画の延長として、日本に留まらず世界に目を向けて幅広く「建築と社会」の幸せな未来を模索したいと考え、パネルディスカッションに先立ち、海外フィールドワークを実施した。今回のゲストの方々も活動する香港、ベトナムに加えて発展が進むシンガポールの3カ国を委員会メンバー自身が訪れ、実際の環境や文化を肌で感じ、それぞれの地域で働く建築家たちのオフィスに伺ってインタビューを実施した。

それぞれの訪問地で得た貴重な知見は、帰国後に報告会を行って他の委員会メンバーと共有し、パネルディスカッションに向けての議論を深めた。また、その経験をパネルにまとめて100周年記念式典当日に展示し、広く情報の発信も行った。(フィールドワークの詳細は、本誌次号にて掲載予定)



Hong kong視察



Vietnam視察



Singapore視察



U-35委員会のこれまでの活動をまとめたパネル展示の様子

### ●100周年企画 パネルディスカッション

今回のパネルディスカッションのタイトル「Architecture & Society/Architect in Society」の背景には、我々が共有する問題意識がある。それは、「今、社会の中での建築の役割が大きく変わってきているのではないか」という思いだ。これまでも建築と社会は互いに関係しあってきた。建築を造るということは、社会にメッセージを発し、大きな影響を与えるということであり、建築家はその「モノ」造りにおいて、社会に対して大きな役割を担ってきた。ところが現在の日本においては、建築が「モノ」の領域に留まらず、ソフトやプログラム、仕組みなどボトムアップで考えていく、「コト」の領域に広がってきているのではないかと感じる。協会が発行する『建築と社会』の100周年記念号（2017年3月号）では、現在の日本社会を活性化させていると考えられる建築やプロジェクトをいくつかのケーススタディーを通して見詰める特集企画に取り組んだ。成功している事例についてみていくと、そこには建築単体だけではなく、プロジェクトを推し進めた人の力があり、また社会と関わっていくプログラム、つまり「コト」の力がとても大きいことがよくわかった。ただ、依然として「モノ」としての建築の力も非常に大きく、どのプロジェクトを通して、良い空間、良い建築は欠かせない。つまり「モノ」だけでも「コト」だけでも足りないということだ。

建築家はその「モノ」と「コト」両方の領域に深く関わるのが求められる、そういう時代になってきているのではないかと感じている。U-35がこれまで取り組んできた活動も、建築の「モノ」と社会の「コト」の領域を解かし、互いの領域に積極的に歩み寄ることで、新しい価値を見出していこうとする同世代の方々に出会い、議論をしてきた。こうした活動からも建築のフィールドが広がってきていることは我々設計者にとってのチャンスだと考え、日本とは異なる社会・文化の中で活躍している4名のゲストとArchitecture & Society（建築と社会）、そして、Architect in Society（社会の中における建築家）の可能性と未来について考え、建築と社会の幸せな未来を模索する議論を行った。



事前ミーティングの様子(上)、開演前のリハーサル風景(下)



4名のゲストを迎えて行ったパネルディスカッションの様子



## 澤 秀俊 Hidetoshi Sawa

(建築家/VTN Architects/ベトナム)

1983年岐阜県高山市生まれ。2005年名古屋工業大学卒業。ミュンヘン工科大学、HEIDE & VON BECKERATH (ベルリン) 後、東京工業大学大学院修士課程修了。2011年テラード・デザイン研究所共同設立。2014年よりパートナーとしてVTN Architects (Vo Trong Nghia Architects) に勤務

## 「これからの建築と社会を考えること」

### ●地球と共生する建築へ

現在ホーチミン市はものすごい開発が進んでおり、日本の高度経済成長期を見ているかのような状況だ。世界のあちこちで際限なく続く資本主義経済を目の当たりにして、自分たちは何をやっていけばいいのかということを実務を通し強く意識するようになってきた。

日々建築設計に関わる中で、マネーゲームの建築から地球と共生する建築へ、人間中心的なものから自然的なものへ、消費的なものから循環的なものへ、短絡的なものから長期的なものへ、資本主義的なものから共生的なものへ、表層的なものから多層的なものへとどのようにシフトしていくのか、が自分の主題である。50年後、100年後に人々が愛着を持てる建築や環境をつくり出すことが、建築設計の大きな意義の一つと考えている。

2011年の東日本大震災時に被災地のカタストロフな状況を目の当たりにして、自然には絶対に勝てない、抗うこと自体が不自然だと感じた。未永く愛され、地球の未来にもよいも

ので、美を創造し、健康で心が豊かになり、つながりを生み出して、自然に抗わないものを指標とし、いかにその理想に近づけるか設計の仕事を通し試みている。

2014年から参加しているVTN architectsでは緑地の少ないベトナムの環境改善や、豊富に手に入る竹を21世紀の新しいグリーンステールとして利用し、自然と人間をつなげる建築をどう創り出すかを考えている。

### ●地球に生きる作法

人間は地球環境に最も大きな影響を与えている。自らも実践する農のある暮らし、自分たちで野菜を育て、お金の依存しすぎない暮らし方は資本主義社会の次の暮らしとしてあり得るのではないだろうか。また、VTN architectsでは人材育成の一環としてヴィパッサナー瞑想を日々の勤務に取り入れている。感覚や呼吸を観察することで、平静な心を保とうとする。このような自然に抗わない暮らし方や考え方は、限界に達している物質至上主義の次の社会への布石となるのではないだろうか。「利己のエゴから共生的エコへ」、日常の生活を通して模索している。



## 吉村有司 Yuji Yoshimura

(建築家/laboratory urban DECODE/バルセロナ)

1977年愛知県生まれ。2000年中部大学工学部建築学科卒業、2016年ボンペウ・ファブラ大学大学院情報工学科博士課程修了(コンピュータサイエンス専攻) Ph.D.、バルセロナ現代文化センター、UNESCO Chair (UPC)、バルセロナ都市生態学庁、カタルーニャ先進交通センターなどを経て、現在、laboratory urban DECODE共同代表、マサチューセッツ工科大学建築都市計画学部所属研究員、ルーヴル美術館リサーチ・パートナー

## 「建築とまちづくりにおけるビッグデータの可能性」

### ●未来の動きを予想する

バルセロナでは主にモビリティ、建築や都市の中で人はどう動くのか、人はどこにいて、どう振る舞うのかというデータを収集し、科学的に分析してきた。最も関心があるのは新しい技術・テクノロジーが如何に建築や都市計画に影響を与えるのか、という点だ。

例えば交通シミュレーションはコンピューター上で、都市の中の車の動きが正確にシミュレーションできるツールだ。現状で既に約92%の正確さでバルセロナの交通が再現できる。このツールを活用し、まちづくりや都市計画に活かす方法は、正確な現状分析に基づいた未来予測として利用することである。

例えば、ある部分に交通規制をかける場合にどこに渋滞がおり、どこに排気ガスが溜まるかということがシミュレーションできる。他にも写真共有サイトを用いた、観光客の行動調査ではネット上にアップしたオープンデータを収集し、その都市が観光客にいかに使われているのかを、詳細に分析できる。

### ●行動パターンから空間の質へ

ICTを用いた歩行者のデータ収集と分析、独自開発した携帯電話のBluetoothをキャッチできるセンサーによりルーヴル美術館における観光客の3つの動向がわかる。1つは来館者の移動軌跡。来館者Aはモナリザ、ミケ、スフィンクスを観たというような移動軌跡。2つ目は鑑賞時間。モナリザを2分50秒という時間が秒単位で抽出できる。3つ目は各作品間の移動時間。このような情報を一年間で、100万人以上収集し、頻出パターンを抽出することでルーヴル美術館における最もよく使われたパスが歴史上はじめてわかった。最頻出パスにより来館者の移動軌跡や行動にパターンが存在するということがわかると、その人の未来予測ができるということを示す。次の一步を予想し、人の動きをマネジメントすることができる可能性が出てくる。これにより建築の空間の体験の質を上げることができると考える。これは建築におけるビッグデータの可能性であり、サイエンスが如何に建築や都市計画、まちづくりに影響を与えるのか、ということである。



## 森山 茜 Akane Moriyama

(テキスタイルデザイナー/Studio Akane Moriyama/ストックホルム)

1983年福岡県生まれ。2008年京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科建築設計学専攻修了。スウェーデン政府給費留学生として2010年コンストファック芸術大学テキスタイル学科修士課程修了。2010年にStudio Akane Moriyama をスウェーデンにて設立、テキスタイルを中心に建築空間における作品を制作。現在もストックホルムにて活動

### 「空間の中の布」

#### ●期待を裏切るテキスタイル

現在、ストックホルムで建築家、アーキテクトと一緒にテキスタイルを用いた空間、アートのインスタレーションを創っていくことを仕事としている。

カーテンデザインの最初の仕事は中山英之氏設計の住宅O邸で、2m×7mの1枚ガラスの前にかかるカーテンだ。建築との接続方法、開閉方法など試行錯誤しながら創った。スウェーデンのゴッドランド島にある要塞跡の空間を改装して住宅を造るプロジェクトでは、銅とウールを編み込んだカーテンを制作した。部屋の音響調整のために凹凸のあるものが必要で、かつ柔らかくて守ってくれるような素材が要求された。普通カーテンというと、「柔らかい」や「温かみのある」ように想像されるが、銅とウールでできた素材は触ると冷たく、柔らかいけれど硬い。見た目と触覚を裏切るものになった。カーテンと言っても装飾的なものとしての布ではなく、布という素材によって新しい空間や感覚を創り出すことに興味がある。

#### ●時間と空間を彩る

展覧会というフォーマットにおいても布を用いた様々な空間的な実験をしている。

コペンハーゲンの展示作品Blue Brickは、ガラスブロックと同寸法の布を異なる色に染めた729個のキューブを縫い合わせている。厚みのある布の壁のようだが、触ると実は柔らかく、しかも透明感がある。オースティンでのインスタレーションCubic Prismでは、4.2m×4.2m×24mの布の構造物を建物と建物の間にワイヤーロープにより吊っている。見る方向により青、ピンク、黄色の色が立体的に混じり合う。

枚方T-SITEのカーテンでは3枚のオーガンジーという薄い布を使った。スパイラル状のカーテンレールにカーテンが収められ、使用していないときでもオブジェのように存在感がある。ファサード側にはアルミ箔プリントを施し、外部からの光を反射することでファサードとカーテンは視覚的に一体になる。インテリア側はファサード側とは異なる色の布を使い、カーテンの表情が外と中で異なる。



## 小室 舞 Mai Komuro

(建築家/Herzog & de Meuron/香港)

1983年大阪生まれ。2005年京都大学工学部建築学科卒業の後、スイス連邦工科大学チューリッヒ校留学を経て、東京大学大学院建築学専攻修士課程修了。2008年よりHerzog & de Meuron (バーゼル) に所属し、2014年よりAssociateとしてHerzog & de Meuron (香港) に勤務

### 「都市スケールと建築スケールを繋ぐ」

#### ●ヘルツォーク&ド・ムーロン事務所での9年

自分を中心に最初竣工したプロジェクトがサーペンタインギャラリーパビリオンというとても小さな建築。内部は不特定多数の人がくつろぎながら集うことが出来る。

オーストラリアのメルボルンの駅のコンペでは駅の開発だけでなく、駅周辺の開発や、水辺のプロムナードなど、都市スケールと建築スケールを繋いで考えた。

現在はこれまでで最も大きな計画である「M+」という香港の新しい美術館を担当しており、2年半ほど香港に暮らしている。

#### ●ランドマークと公共スペースの創出

香港は文化的に強くないという意識から、政府が力を入れて文化地区として開発し、ニューヨークのMoMAやパリのポンピドゥーに匹敵するような美術館を造りたいと考えているため、ミュージアムフォービジュアルカルチャーと呼び、アートだけでなくデザインや建築など幅広い分野の美術館となるのが「M+」だ。何もなかった場所を政府が大

規模に埋め立て、そこ全体をWest Kowloon Cultural Districtと呼び、大開発を行っている場所での一番の目玉プロジェクトをコンペで勝ち取り担当することになった。美術館を造るだけでなく、香港にとってのランドマークになり、かつ公共スペースになることが目的だ。逆T字型のTの下の部分を大きなフレキシブルで使いやすい大きなギャラリーとし、一層上に上げることで大きなパブリックスペースとしてのロビー空間を造りだした。タワー部のファサードはLED照明により、美術館全体が大きなアートの映像を流すスクリーンにもなり、海の反対側からも眺望できる設計となっている。ギャラリーをタワー部に持ち上げたことで、上部をルーフガーデンとして公共空間を創りだした。敷地の片側に建物をかためて公共空間を創るのではなく、建物の上に配置することで、建物的にも公共空間の在り方としても面白くできる。エントランスは全方向にオープンで街の中の空間のような感覚をイメージしている。現在絶賛大工事中であり、2019年オープン予定となっている。

## ◇パネルディスカッション

## 『Architecture &amp; Society / Architect in Society』

Architect in Society、社会の中にある建築家がその社会をどう見ているか——。それが、1枚の写真から浮き彫りになることを期待して、事前にゲストへ「それぞれの都市でお気に入りの場所や空間を教えてください」とリクエストした。本題のテーマへと議論を進めるきっかけとして、4人のパネラーに、どのような視点で写真を選んだのか、あるいは、写真の中に社会の最近の動向や文化的な背景があるのか等について聞いた。

## ベトナム

## ●建築と気候、文化の密接な関わり

澤：この写真の場所だけではなくベトナム南半分は、熱帯なので冬がない。冬がないので、建築の振る舞いはほぼこういう感じです。これはカフェですけれども、ローカルの食堂から呑み屋さんや飲食店には、ほぼ壁がなく、壁がある所といえば、トイレとか台所とか、裏方だけなのです。あとは柱と屋根だけ。そこにみんなバイクで集って、お茶やビールをはじめ、有名なベトナムコーヒーを飲みながら人が集まる。僕が常々思っているのは、建築の在り方や振る舞い方と気候と文化というのはすごく密接に関わっていて、冬がない熱帯気候が半屋外空間を可能にし、建築は骨組みとして現れている。そのファサードには人の活動が街並みに溢れ出て、都市風景を形作る。ベトナムではどこでもこんな感じですね。農村でも、みんな雨が降ってきたらオーニング



を作って雨をしのぎながらその下でずっと風通しよく過ごしている。一年を通して居住空間がそうなっているのは、冬季寒い日本ではあまり見られませんね。日本でも中間期には、同様な使い方ができる場所が多くあり、すごく気持ちいいですね。ベトナムで好きなのはこういうところですね。

三谷：今回の海外視察でバンコクにも行ったのですが、そこも同じように道に人の活動がはみ出し、オープンになっていて賑わっていました。そういうアジアらしい賑わいの作り方があって、共感しながら聞いていました。これと、澤さんの活動やベトナムに対する社会の見方が関わっているような気がするので、後ほどその話を伺いたいと思います。

## ストックホルム

## ●誰もが寛げる水辺空間に溢れる街

森山：ベトナムの後に寒そうな写真ですが、ストックホルムで私の好きな風景として持ってきました。スウェーデンは人口が約900万人しかいませんが、国土は日本と同じぐらいの大きさです。ストックホルムは島がたくさん繋がってできているので、どこでも水辺が

あり、夏は泳ぐこともできます。この写真に写っている黄色い建物に私のアトリエがあります。工場地帯の近くでセメント工場もあるようなところですが、こんなところでも夏は昼休みに泳いだり、ゆっくり散歩できたり、誰でもゆったりと過ごせる空間です。ストックホルムは計画された公園のようなところが割と少ないのですが、誰もがゆっくりできるような場所として水辺があります。それで水辺の写真を持ってきました。

三谷：なんて綺麗な場所で働いているのだろうと羨ましくなる写真ですが、都市の中で自然との関わりや誰もが寛げるというポイントが、森山さんのお考えとリンクするのかなと感じたので、後ほど伺いたいと思います。

## バルセロナ

## ●生活の質を重視するカタラン人の文化

吉村：この写真は僕がバルセロナ都市生態学庁で働いていた時の、僕のデスクから見えた窓際の風景です。この事務所はビーチの真ん前にあります。バルセロナの人は、生活の質を上げるのに大変な苦勞を重ねておりまして、自分の人生をいかに楽しむかということにか



ホーチミンの半屋外空間



ストックホルムの水辺

けて、カタラン人の右に出る民族はいないのではないかなと思っています。金曜日はだいたい3時で仕事が終わります。サマータイム（6月から9月ぐらいまで）の時期になると、毎日3時で終わります。皆さん服の下に水着を着てきて、3時に仕事が終わったらサンドイッチを食べながらこのビーチに真っすぐに向かいます。日が沈むまでそこで過ごすということがバルセロナの人の楽しみの一つとなっています。というわけで、これがバルセロナの社会そして文化のプレゼンテーションかなと思い、この写真を選びました。

**三谷：**これも素晴らしい環境ですね。バルセロナのオープンな空間を大事にする文化が興味深く、先ほどプレゼンテーションいただいた分析との関連をお聞きしたいと思います。

## 香港

### ●高密度ビルの屋上スペースの活用

**小室：**これは香港の事務所から見える風景です。香港中心部の密度の高い場所に事務所があるのですが、地上階はゴミゴミしていて密度も高いし、建物の中はエアコンが効き過ぎているし、意外と屋上がすごく気持ちよかったです。屋上のバーなども増えているのですが、ここはもともと何もないただの廃屋みたいだったところを一年くらい前に誰かが見出して、たぶんイリーガルだと思うんですけど、屋外専用のヘアサロンをはじめて、見ているとすごく気持ちよさそうなのですね。そういう場所を見つけて使っていく動きがあるのは面白いなと思い選んだ写真です。

**三谷：**香港に取材に行ったチームからも、地

上面でのパブリックスペースは限られていて、屋上や上階に居心地の良い場所を獲得しているという話を聞いており、その特徴的な例を見せていただいたと思います。これも先ほどの「M+」と絡めてお話を伺いたいと思います。

### ●建築と社会の新しい発展の仕方

**三谷：**皆様から写真をご提示いただき、建築家が社会でどういうものを特徴的なものとして、好ましいと思っているのかを抽出しました。ここからは写真とこれまでのプレゼンテーションとを絡めながら伺いたいと思います。

事前にお話をお聞きした際、澤さんはベトナム社会に対して、都市開発により画一化された街ができてしまう危機感をお持ちだと伺いました。先ほどの写真はベトナムらしいコミュニティの在り方が残り、社会と建築が上手く関わっている例として出していたのではないかと思います。場所の在り方と人の振る舞いと気候が建築を通して自然に一体になっているところが、澤さんの考えや作品とリンクしているのではないかなと思うのです。実際に澤さんが思うベトナムへの危機感、それとヴォ・チョン・ギア事務所での活動を絡めてお話いただけますか。

**澤：**ベトナムは今、日本の高度経済成長時代のようなバブルです。都市近郊ではすごい数のタワーマンションを、一体これだけの部屋数に誰が住むのかというくらい高密度に建てています。確かにベトナムの人口は増えていて、平均年齢が28歳です。日本とは全く対極です。同様にインドも増えています。そのような発展途上国が日本や欧米が経験してきた

ような発展の仕方をしたら、地球がおっつかないような気がします。成熟する過程である意味一度失敗し、縮小していく日本という国で建築家として活動してきた僕が、発展途上のベトナムで設計する際に、建築・社会・自然の新しい発展の仕方を提示できれば、それが他の発展途上国などのモデルになるのではないかなと思います。例えばアフリカも肥大しており、同じことが起こっている。中国も発展してある程度経ちましたが、経済的な不安定を招き、その経済成長のしわ寄せとして自然破壊に繋がっています。人間の欲望は抑えられないので、うまく地球と共生しながら正しい発展の仕方、つまり自然も喜ぶし人間も喜ぶようなWinWinの関係を模索したいと、いつも思っています。

**三谷：**それは、ヴォ・チョン・ギアさんが竹のようにローカルで揃えられる素材を使った建築を造っていることと親和性があると感じていらっしゃるのですね。

**澤：**そうですね。

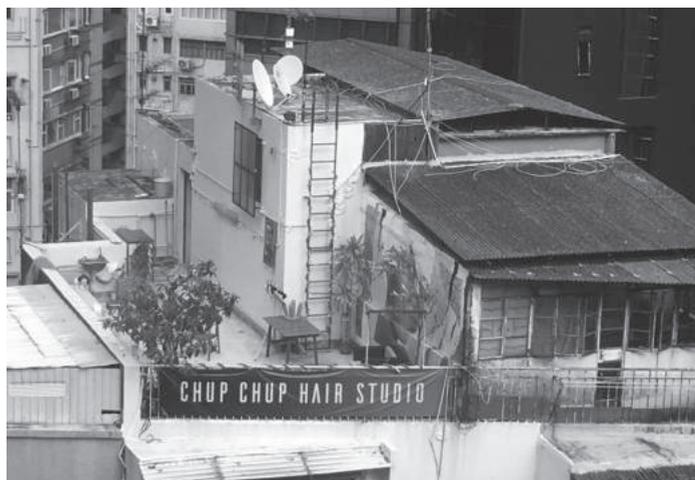
**三谷：**「資本主義の次のデザイン」という澤さんの言葉がすごく印象的で、その発端が何なのか考えていましたが、今のお話を聞いて何となく繋がってきたように思います。

### ●社会民主主義国家 スウェーデン

**三谷：**一方で森山さんのお写真のスウェーデンは高齢化や福祉政策が進んでいて、つまりベトナムと日本の社会の、もっと先にスウェーデンがいつているような印象です。また文化的にも多様性がある社会で創作活動をされている中で、社会から何か影響を受けて



バルセロナのビーチ



香港：ビル屋上スペースの理髪店

いることや、社会に対してどういふものを提示していきたいという思いはありますか。

**森山：**そうですね。8年を過ごす中でいろいろなことに影響されてきたと思っています。先ほど資本主義のお話がありましたけれど、スウェーデンという国は「社会民主主義」といわれており、税金は消費税が25%です。その代わりに、保育園も学校も全部無料で育児休暇が最大1年半もらえる。しかもそのうちの3カ月はパートナーのどちらかが強制的に取らないといけない。ですから男の人がベビーカーを揺らしながらお茶をしている風景は当たり前です。それにストックホルム市ではベビーカーとともにバスに乗車すると切符を買わなくて良いし、混んでいてもみんなすぐにベビーカーのためのスペースを空ける。もう一つ特徴的なのは、スウェーデンはヨーロッパでドイツに次いで2番目に移民を受け入れている国で、中東やアフリカからたくさんの方が来ています。そういう国なので、文化背景が違う人に対しての接し方を学校で徹底的に教えられています。私も外から来た移民の一人になるのですが、海外から来た人に対しても、外国人として扱わないで一人の人間として接してくれます。そういうのは素晴らしいなと思っています。そういう環境が自分の作っているものに直接的に関係しているのかは分からないのですが、日本に帰って来た時、良いことも悪いこともまっすぐな視点で見つめているという意識はあります。

**三谷：**先ほどの写真の、公園ではないけれど誰でもいられる場所が、多様な民族や年齢層を受け入れ、市民が憩えるということにつながっているのかなと思いました。また、森山さんはインスタレーションなどの活動を通し、人と共有する「思い」のような部分を創っておられる感じがしました。体験することでの

ろんな人がそれを思い思いに感じられるところが、建築より更に自由な感じがして、そういう社会を包み込むようなものを創りたいという意識があるのかなと思いました。

**森山：**私は英語もスウェーデン語でも大変流暢な訳ではないので、言葉だけで全てが伝わるとは思いません。でも、言葉以外のもの、例えば音楽とか目に見えないものなどからも何らかの意識の共有ができると思っています。そういう意味で、ものを作るというのは一つのコミュニケーションの方法になっていると思います。

### ●都市共同体思想と発展

**三谷：**吉村さんから、バルセロナはオープンスペースがたっぷりあって気候も良く、街に出て生活の質を上げようと人々が思っていて、そういう公共性に敏感になっているとお聞きしました。それは香港の状況と対極的なのではないかと思うのですが、お聞きになってどう思われましたか。

**吉村：**バルセロナという都市は、公共空間のデザインや公共空間政策で世界的に知られています。80年代くらいから「バルセロナモデル」と言われ、スクラップアンドビルドで大規模に開発するのではなく、既存の都市を、都市組織を大切に保存しながらも、小さいパブリックスペースを入れていって、ツボを押しながら都市全体、もしくは歴史中心地区全体を再活性化するという政策をとって大成功した都市です。ではなぜそのような公共空間政策が成功したのかというと、これは僕の個人的な見解ですが、おそらく市民の一人一人の意識の中に都市共同体思想というのが根付いているのではないかと思います。都市共同体思想とは「バルセロナという都市もしくは街角が私のものだ、この都市は私の都市だ」という強い意識で、それが彼らの中にあり、そういう市民の意識に支えられて公共空間というものが立ちあがってきて、ボトムアップ的にバルセロナの公共空間を支えているのではないかなと僕は思っています。

**三谷：**「自分の街は自分で綺麗にしたい」という愛着や公共心が根付いているのは理想的だと感じます。私が視察したシンガポールも、政策的にオープンスペースを計画し、市民に



小室舞氏

も緑を大事にする意識が根付いた社会で、似ているところがあるように思いました。一方、小室さんの「M+」でパブリックスペースを計画に取り入れたことは、香港では珍しい事例ではと思ったのですが、いかがですか？

**小室：**香港という密度が高いというイメージがあると思いますが、実はその分、政府が開発できる土地を限定していて、自然もたくさんあります。一番有名なタワーのエリア以外には結構緑があったり、ちょっと行けばビーチがあったりレクリエーションの機会はあるのですが、どちらかというみんな「都市は都市、周りはレクリエーションで外に行く」という感覚の方が強いです。人と会うとなるとショッピングモールの涼しいところに行く、という感じになっています。「こういうパブリックスペースもあって使える」ということや「美術館という文化を楽しむ時に一緒に自然も楽しめるような環境もある」ということなど、まずそのようなパブリックスペースの存在を知ってもらってところから始めないと、設計する側のチームも「こういうスペースが香港にできたらみんなどう使うだろう」というのがなかなか想像できなかったりもします。そういう意味では、パブリックスペースという環境にユーザー自身が慣れていく必要があるのだと思います。

**三谷：**パブリックスペースを持つ美術館に対する、現地での期待は高いのでしょうか？

**小室：**そうですね。文科系の人、特にアート関係者にとってはすごく期待値は高いですが、一般の人は期待するものの、「公共のプロジェクトはまた遅れるのではないか」みたいな印象があり、少し懐疑的です。たぶんできて使ってみないと、分かってもらえないのだろうという気はします。

**三谷：**なるほど。これまでのお話から、



U-35委員会 三谷介介

ちょっと理想論ですが、澤さんが危惧する乱雑な開発に対して、バルセロナの公共性、都市に対する愛着、誇りみたいなものがあれば、抑制するチャンスにならないでしょうか。

**澤：**そうですね。僕のスライドにダイアグラムがありましたが、ホーチミンやハノイの中心地は1人当たりの緑地面積が世界ワーストワンです。ホーチミンはフランスの植民地時代に植えられた街路樹は大きく立派になっていますが、1人当たりの緑地面積が本当に少なく、中心地にはおそらく2つか3つくらいしか公園がありません。ホーチミンの一人当たりの緑地面積が0.7㎡で、香港や東京は比較的大きな値です。ですから、私たちが緑化建築に力を入れている背景には、建物を建てることで緑の密度を減らすことはしたくないので、建てる時にポケットパークを街の中に造っていくという思いがあります。ベトナムは社会主義国家ですが、人々が「緑があることが好ましい」と感じるようになると、国策として緑化ガイドラインも作れるのではないかと思います。実際に弊社代表のギアはベトナムの国交省へプレゼンに行って、シンガポールのように壁面や屋上の一部を緑化するような規制をベトナムにも作りましょうと掛け合っています。

**三谷：**私もシンガポールで、建物の緑化義務が大変厳密だという話を聞いてきました。そうすると投資や設計の面で困難を伴うこともあって、経済発展と都市の公共性を守る政策をどう一致させるかは難しい課題だと思います。「ギアさんが都市に緑を増やす活動をしているのであれば、彼に建物を頼んでみよう」という住民のマインドが醸成されてくるのが一つの突破口になるのではないのでしょうか。政府がトップダウンでやるのとは反対のボトムアップの方法かもしれません。

### ●文化の違いと設計のアプローチ

**三谷：**他の方の取り組みで、自分の住む都市あるいは自分ならこうかな、と思ったことがありますか？例えば小室さんは現在香港にいらっしゃるので香港のパブリックスペースの在り方を意識するけれど、今後はヘルツォーク&ド・ムーロン事務所としてまた違う国で設計する可能性があるわけですね。

**小室：**そうですね。私が今まで関わってきたプロジェクトでは、アメリカ、イギリス、中東等がありますが、それぞれでみんな違います。例えばアメリカのLAの美術館のコンペを一度やりましたが、ヨーロッパ的な感覚で入り口の前にカバーアウトドアスペースを造ってたまるような場所を作るアイデアがあったのですが、実際にLAだとほとんどの人が車で移動します。そうすると、駐車場からロビーに入る所が実は一番のメインのエントランススペースなのです。そういうのを聞いてみると、やっぱりその街と文化を知らないと、いつも自分の感覚でそのままいったらそれが成功するわけではなくて、それぞれの場所での暮らし方や気候に応じたパブリックスペースを提案できるよう、柔軟に対応していければと思っています。

**三谷：**吉村さんはバルセロナからアメリカに本拠を移そうとされているところですが、アメリカ社会においては、バルセロナとはまた違う課題があるとお考えですか。

**吉村：**僕がいるのは、ボストンのまたその隣にあるケンブリッジという都市なのですが、ケンブリッジは比較的ヨーロッパに似ているのかなという感じがしています。というのも、僕の認識ではアメリカ社会というのは先ほど言われたように車社会で、いろんなところに行くのに車を使わなければならないのですが、ケンブリッジ市はパブリックトランスポーションが充実していて、バスや地下鉄を使うといろんなところに行けます。また市民の皆さんがパブリックスペースをうまく活用しているので、その辺はバルセロナと似ている気がします。社会文化の背景みたいなものはまだ住んで短いのでわかりませんが。

### ●ビルバオの事例 都市戦略による都市再生

**三谷：**吉村さんの分析やデータ化のお話をお聞きして、今までの建築設計のアプローチとは違うと感じました。特に都市に対するアプローチの仕方が違う。例えば、過去には同じスペインのビルバオの街がグッゲンハイム美術館の建設によって活気付きましたよね。一般には建築の力が街を押し上げた例と理解されているように思うのですが、ビルバオの事例についてお聞かせいただけますか。



吉村有司氏

**吉村：**ビルバオはフランク・ゲーリーがグッゲンハイム美術館を造って都市を甦らせたと言われており、確かにそうです。というのもビルバオは重工業が盛んな都市で、1970～80年代から産業が変わってくるに従って、やや廃退していきました。その状況を見かねて、市民の方がボトムアップ的に都市を甦らせようとイニシアチブをとって再生計画を作ったのですが、ここで我々が見落とすべきではないのは、グッゲンハイム美術館だけで甦ったということではないということです。ビルバオ市はグッゲンハイムのシンデレラ都市ではないと僕は思います。そうではなくて、ビルバオ市役所とバスク州政府がビルバオ都市再生計画を10～15年くらいかけてまとめあげています。その案が都市戦略として優れたものだと思っています。それで、最後のピースとしてグッゲンハイム美術館を建てるにあたってゲーリーがたまたま選ばれたという文脈なのです。だからあそこでゲーリーがもし選ばれていなくても、ビルバオ市は都市再生に成功していたと僕は思います。ですから、ここから学ぶべき教訓として、都市戦略をしっかり作って都市再生していくのがよいのではないかと僕は思っています。

**三谷：**上手いくいだろうという戦略のベースの上に、さらにそれを加速させる建築というパワーが働いたということでしょうか。

### ●インフラと社会

**三谷：**澤さんがいらっしゃるベトナムはこれからさらに発展していくと思いますが、市民の街への愛着を育てる方法として、森山さんのパブリックアートのような取り組みはどのようにお感じになりますか？

**澤：**おそらくここにいる4人の拠点の中でベトナムが一番インフラが整っていないと思



澤秀俊氏

ます。ご存知の通り、ベトナムはバイクの海です。国民一人当たり1台か2台持っており、ホーチミンは道路もバイクで溢れている。僕もその大河の一滴でバイクを運転するのですが、そうでなくては動けないのです。最近はお金持ちが増えてきていますので、渋滞問題が日々深刻化しています。例えば、バンコクやジャカルタはモータリゼーションが相当発達しているので、都心から郊外へ帰宅するのに2、3時間かかると聞きました。ようやく今ベトナムのハノイとホーチミンでは日本も出資して地下鉄を造っています。

**三谷：**分かりました。話はまだ尽きないのですが、本日他の方のお話もお聞きになった上で感想をお聞かせいただけますか。

**森山：**今のお話で面白いなと思ったのが、スウェーデンは対極で、電車も地下鉄も全部あります。これ以上インフラを整備する必要がないくらいです。ただ、市民の環境に対する意識が高く、飛行機に乗ると排気ガスを排出するため環境に良くないから電車で移動しようという考えが常識になりつつある。例えばヨーテボリの近くのボロスという街にある国立大学にレクチャーに呼ばれたのですが、大学が手配する交通手段として飛行機で来るという選択肢はありませんでした。「大学のポリシーなので、時間がかかっても電車で来てください」と。

**澤：**ベトナムがそこに到達するのに何年かかるか、ちょっとわからないですね。僕らがおじいちゃんおばあちゃんになったくらいでしょうか。

**小室：**バーゼルはトラムとバスで成立する規模で、地下鉄も必要ないのです。一方香港はインフラが整っているのでもあまり自覚しないのですが、マスを扱う上でのインフラは重要な要素です。アジアだとどうしても、ヨーロッパのように綺麗にはすまないというか、

どんな場所でもすぐ人が増えるのでそれをどう扱うかといった視点が外せないんだろうなと思います。そういうことにこそ、吉村さんのリサーチで香港の人の密度がどのように動くのかということや、それに合わせて空調を適温に調節する方法など、意外とそういうテクノロジーがアジアで使えたら面白いのではないかと思いました。

**吉村：**データはこれから益々たまっていく一方で、都市が詳細に分析できる可能性が出てくると思います。こういうものをぜひ建築やまちづくり、都市計画に活かしていけたらさらに面白いのではないかと、我々の社会にとって大変有益ではないかと思っています。

**三谷：**澤さんからお願いします。

**澤：**僕が社会と建築を考える時に、今日お話しさせていただいたように、食や自分の健康な身体と精神を保つことの重要性や、今お話にあったモータリゼーション等も、社会構造と密接に関わっています。都市がどのように発展するかについては、やはり何を使ってどのように人が生活するか、ということが重要ではないでしょうか。ベトナムを見ていて、日本の土木技術は本当にすごいといつも思います。強い雨が1時間降ると街のあちこちで膝ぐらいまで浸かってしまいます。排水がとても悪いことに加えて、メコンデルタの端っこが大都市になった街なので海拔も低く、水害に対してとても脆弱です。バイクのタイヤの半分まで浸かってしまうくらいのことが都市の真ん中でもある。やはり建築と土木の領域がもっと溶け合って、建築家だけではなく、色々な分野の人が街を一緒に考えていく必要があるように思います。吉村さんのシミュレーションもどちらかというと、土木等、都市スケールの分野に向かうと思うのですが、これからはみんなでアイデアを共有しながら、どのように発展できるか、面白くできるかと考えていくことはすごく重要だと思いました。

### ●異なる社会の参照による可能性

**三谷：**本日のディスカッションについて私から総括させていただきたいと思います。事前に「どんな話をしようか」と考える過程で、アーキテクトとして社会に関わっていると、その社会固有の課題に対してアプローチ

するという考えが皆さんの中にあるのではと思っており、実際にお話をお聞きしてやはりその通りだと感じました。その社会にいたからそうなったというパターンもあるし、問題意識を抱えていたから自ずとその社会に行った、ということもあるかもしれません。一方、小室さんのように、世界的な事務所として様々な社会に合わせてアプローチの仕方を都度アジャストしていく例もありました。

私たちの事前の議論の中で、「社会」という言葉自体は曖昧で、「何をもって社会と言うのか？」という問題があるという意見が出ました。本日のディスカッションで視座として面白いと思ったのは、それを一つ一つ微細に見ていくと、環境や緑・食・交通・健康といった社会の中で建築以前にベースにあるものが、実はみんなの心配事でもあるのではないかと、ということです。そういうものをみんなで考えようとする事自体が大事なのではないのでしょうか。問題があるということ自体はマイナスかもしれないけれど、問題があるからこそ、みんなが社会に対して考えるチャンスにもなると思うのです。それは日本でも同じで、スウェーデンが現在先行している福祉や高齢化も日本の課題だと思っています。

皆さんの取り組みはレベルが高く、それを何うだけでも面白い。なおかつ、他の社会での取り組みが、自分の社会に置きかえられたら先ほどの吉村さんのお話のように可能性が広がるかもしれないとか、そういう参照し合えるものが見つけられることに意味があるように思いますが、「どれが正しい」という結論はないと思いますが、様々な問題を共有できたことが良かったし、それぞれが社会に戻って考え、また話せる機会があればいいと思います。我々U-35委員会としても、本日お聞きしたことは新たな問題意識として持ち、各自の実務や今後の活動につなげていけたらと思います。勉強になる機会をいただき本当にありがとうございます。

### ●会場質疑

**質問者1：**私は現在、建築を勉強したいと思っていて、まだ知識が足りないのですが、日本の都市は欧米やアメリカに比べて自然が少なく、お話にあったポケットパークのようなものが必要だと思っています。ですが、

ももとの考え方が日本には根付いてないと思っていて、それをどうやって克服してこれからの大阪や日本の都市を緑豊かにしていくのがベストなのかをお聞きかせください。

**澤：**植物を建築に載せたり緑化していくことは、確かにお金もプラスアルファでかかることだしメンテナンスの課題もあるのですが、僕がいつも思うのは、木陰の下など自然と近い関係が嫌いな人はいないですね。その真逆の環境が好きだと言う人はいないと思うのです。それは人間の本質や本能に関わっていて、人は自然を楽しむために近くにいたいので、都会の人はピクニックやハイキングにたまに息抜きに行ったりすると思います。田舎にいると自然というのは特に厳しく災害もありますが、いかにそこで折り合いをつけながらいい関係を結んでいくかというのが健全な生き方だと思うのです。そういうことを理解していただけるような方であれば、それを共有して設計にフィードバックしていけるのではないかなと思います。

**質問者1：**ありがとうございます。

**三谷：**これから建築を勉強したいということは、今高校生？高専生？

**質問者1：**これから大学に入学します。

**三谷：**そうですか。そういう方に聞きに来ていただいた事が、僕はすごくうれしくて、今日はやってよかったなと思いました。

**質問者2：**楽しい講演をありがとうございます。お二人の方にお聞きします。吉村さんのビッグデータのお話を興味深く聴かせていただいたのですが、最後にまちづくりや設計に活かしたらより良くなるというお話もありました。今までに採取したビッグデータが活かされた事例があれば教えてください。また、美術館において利用者が通るルートが分かかったと仰っていましたが、弱者やマイノリティーの方に対する対応がそういったデータから可能になるのかということをお聞きしたいです。もう一つは森山さんにお聞きしたいのですが、スウェーデンは成熟した豊かな国というイメージがあります。今日の4人の方のプレゼンでも、他のお三方は具体的な都市の問題に対してプレゼンをされていたのに対し、森山さんはより感覚的に豊かなものを求めて気持ちの良いものを作られていると感じました。スウェーデンのように成熟した街は、逆にま

ちづくりや設計に何か問題意識や危機感があるのか、これからどう発展していくのかを教えてくださいたいと思いました。

**吉村：**最初のご質問ですが、いわゆるビッグデータが建築デザインに寄与する例は、僕が知る限りまだそんなに具体的には出てきていないと思います。例えば僕が今ルーヴル美術館で試行錯誤しているのは、デザインの一步手前で、来館者の方がこういうルートを通してモナリザのところがすごく混雑しているとしたら、そこをまずデザインで変えるのではなくて、交通規制というか、人の流れをサインなどを用いて少し変えていければいいんじゃないかということを試している状況です。そこからさらに、「こういうサインをつけたらこうなったから、じゃあ次はデザインに反映しよう」というステップを踏んでいる状況が最先端だと、僕が見る限り思っています。

二つ目のご質問の、ビッグデータでマイノリティーの方の生活の質が上がるのではないかということについてですが、「オープンデータ」ということが今ICTの分野で言われています。現実に行われているプロジェクトとして、車椅子の方が都市の中で困る段差について、市民のみんながモバイルフォンで「ここに段差があった」という感じでサーバーにアップします。そうすると「みんなで作る段差のオープンマップ」みたいなものができます。そういう感じで、これから段々とオープンデータ、ボトムアップ、市民参加といった方向に向かうのではと思っています。

**森山：**ストックホルムやスウェーデンのまちづくりへの問題意識ですけれども、私が知っている限り、郊外の住宅開発を除いて、ストックホルム市内では新しく建物を建てるというのは本当に少ない。それより、今ある環境をどう使うかということに行政が意識的だなと思っています。例えば、50～60年代までにできた住宅地には市民が集まれるような場所をきちんと造っていて、例えば屋外劇場や映画館、プールなど小さな町にもちゃんとあるんですね。例えば、そういった屋外劇場を使って、レベルの高い演劇やダンス、コンサートを誰もが無料で観られるようなイベントを毎夏やっています。そういう風に、できたものをうまく使って、誰もが参加できるプ



森山茜氏

ログラムを市が率先して行なっています。他にも、年に数回イブニングマラソンというのがあるって、街全体をマラソンコースにしてしまつて夜の19時～24時くらいまでひたすら市民が走り続けるようなイベントもあります。何か特別なものがなくても、気楽に街を楽しんで使う仕組みが定着しつつあるような気がします。

**質問者2：**ありがとうございます。

**三谷：**お時間となりましたので、ここでディスカッションを終えたいと思います。本日のお話には我々にとって新しい発見がたくさんありました。建築のモノとしてのコンセプトやデザインは、これからも各自が追及し続けるそれぞれの課題だと思うのですが、それと社会の中にある解決すべきことの両方をきちんと見つめ、そこに建築が向かっていければ、建築と社会、あるいは社会の中における建築家の関わり方を掘り下げることができるのではないかと思います。

#### ●パネルディスカッションを終えて

この度の企画にあたり、我々は1年以上に亘り議論してきた。テーマ、お招きするゲスト、視察の必要性とその行き先。いずれもこれまでの活動を拡張し、妥協無く考えたつもりである。その結果、同世代のゲスト達から受ける刺激、世界の状況を肌で感じて得た視野とネットワークの全てが貴重な財産となった。今後もそれを活かした活動と発信を行い建築と社会の未来に貢献したい、という思いを強くした経験だった。同時に、ディスカッションをお聴き下さった方々にメッセージを感じ取っていただけていたら幸いである。多忙な中、快く遠方からお越し下さったゲストやご協力下さった取材先の皆様、本企画をご支援下さった方々に深く御礼申し上げたい。

(文責：興津・三谷・宮武・若江)